

# 鹿児島における離島と都市部の特別支援学級担任が直面する困難と研修ニーズの把握に関する研究

○深浦望

肥後祥治

(熊本大学特別支援教育特別専攻科) (鹿児島大学教育学部)

KEY WORDS : 離島 ・ 特別支援学級担任 ・ 研修ニーズ

## I 問題と目的

鹿児島県は、南北 600 キロに広がり、小学校の特別支援学級は 652 学級、中学校の特別支援学級は 275 学級である（平成 28 年 4 月 6 日現在）。さらに、社会的資源の少ない離島やへき地を多く有しているため、それらの地域で特別支援学級の担任として勤務することは、都市部で勤務する場合とは異なる困難やサポートの必要性を感じていることが予想される。

そこで本研究では、鹿児島市内と離島の特別支援学級の担任を対象とした調査を実施し、そこから特別支援学級担任の現状を地域別に把握することを目的とした。

## II 方法

### 1. 対象者

鹿児島県において、特別支援学級のある鹿児島市内の小学校 73 校、中学校 36 校と離島の小学校 48 校、中学校 27 校を対象としアンケート調査を行った。その対象者は特別支援学級担任 407 人であった。特別支援学級が複数設置されている学校には学級数分の質問紙を郵送した。

### 2. 期間

平成 28 年 11 月～12 月に郵送にて配布し、郵送にて回収した。

### 3. 調査方法及び調査内容

調査方法は、郵送法を用いた。質問項目及び回答選択肢は、知的障害特別支援学級（小・中）の担任が指導上抱える困難やその対応策に関する全国調査（特別支援教育総合研究所，2014）及び小学校特別支援学級担任者の専門性向上に関する調査（竹林地，2014）、特別支援学級経営ハンドブック（鹿児島県，2016）をもとに作成した。また、鹿児島県教育委員会と鹿児島市教育委員会に事前に相談し、修正したものを質問紙にした。

### 4. 分析方法

特別支援学級の経験年数ごとに 4 群に分けて結果を整理した。それらは、1 年未満の新任者の群：I 群，1 年以上 3 年未満：II 群，3 年以上 6 年未満：III 群，6 年以上：IV 群であった。

## III 結果と考察

本報告においては、「アンケート回収率」、「免許の有無」、「教育課程や指導に関する課題や困難」の結果の一部について報告する。

### 1. アンケート回収率

Table 1 にアンケート回収率を示した。

Table 1 アンケート回収率

	発送件数	回収件数	回収率
鹿児島市小学校	206 件	130 件	63.1%
鹿児島市中学校	75 件	42 件	56%
離島小学校	87 件	59 件	67.8%
離島中学校	39 件	27 件	69.2%
合計	407 件	258 件	63.3%

### 2. 特別支援学校教諭免許状の有無

Table 2 に各地区、各校種における特別支援学校免許状の保有率を示した。特別支援教育資料（平成 27 年度）によると、平成 26 年度の特別支援学級担当教員の特別支援

学校教諭免許状保有率が小学校、中学校それぞれ 32.4%、26.4%であるの比べると、離島の中学校は全国の平均を下回っているものの、鹿児島市内の小・中学校、離島の

小学校は免許状の保有率が高い。

### 3. 教育課程や指導に関する課題や困難

Table 3 に教育課程や指導に関する課題や困難についての回答で各群の総数の過半数が課題や困難を感じているものを示した。以下は、鹿児島市内と離島の小学校の結果である。

Table 2 特別支援学校免許状の有無

	保有者数	保有率
鹿児島市小学校	73 人	56.1%
鹿児島市中学校	18 人	42.8%
離島小学校	29 人	49.1%
離島中学校	4 人	14.8%

Table 3 教育課程や指導に関する課題や困難

	鹿児島市内 小学校				離島 小学校			
	I 群	II 群	III 群	IV 群	I 群	II 群	III 群	IV 群
A：特別支援学校学習指導要領にある知的障害教育の教科や自立活動等を組み合わせた教育課程の編成				○	○	○	○	○
B：学級の児童生徒全員が集まる授業時間の確保	○							
C：重複障害のある児童生徒についての医療面や身体面への適切な配慮								
D：集団での授業を全ての児童生徒のニーズに合うように展開すること	○	○	○	○	○		○	○
E：個々の児童生徒に合った学習目標・内容の選定	○	○	○		○		○	○
F：パニック、自傷行動、他傷行動等の行動上問題を抱える児童生徒の対応			○	○			○	
G：感覚の過敏性やこだわりなどへの対応						○		○
H：他の特別支援学級との合同授業における障害の特性に合った授業の展開								

鹿児島市内と離島の小学校における特別支援学級の経験年数別で整理すると、集団での授業を全ての児童生徒のニーズに合うように展開することに関しては、特別支援学級の経験年数が長くなったとしても解決していく課題ではないということである。また、設問 E と設問 I では、I 群、II 群、III 群では過半数が課題や困難を感じているのに対し、IV 群では、割合が低くなっている。このことから、個々の児童生徒に合った目標・内容の選定や児童生徒に合わせた教材・教具の用意は特別支援学級の経験が長くなるにつれて対応や工夫ができるようになる実態がわかる。

離島の小学校では、全群が共通して過半数を超える高い結果となったのは、設問 A のみであった。設問 I に関しては、III 群において 50.0% を下回る 46.1% という結果となった。鹿児島市内の小学校と比較すると、特別支援学級の経験年数が長い IV 群も課題や困難を感じていることが相違点として挙げられる。

(FUKAURA Nozomi, HIGO Shoji)